

集まったのは清掃業界のプロフェッショナルたち。ハウスクリーニング業にあたる鳩村憲明さん。空き家の整理や清掃、そして遺品整理の専門家・古澤直子さん。全国展開する便利屋として主に遺品整理を担当する小島敦さん。ゴミ屋敷をはじめ、数々の現場を手がけてきたベテランの木嶋正さん。一現場で何か違和感を覚えることはあるのでしょうか？

鳩村 人の気配を感じることはありますよね、見えないけれど。古澤 何ですかね、オバケ？ でしょうか。

鳩村 それに近いものか何かが、通り過ぎたのか。

小島 よくありますね。

古澤 ありますね。

鳩村 特に後ろですよね。

古澤・小島 後ろ。

小島 決して前ではないです。一古澤さんには、忘れがたい恐怖体験があるそうですね。遺品整理の最後に、一体の人形の処分を頼まれたとか。

古澤 処分してほしいと言われたので、「わかりました」って受け取って、箱に入れてその人形を事務所に持ち帰ったんです。事務所の2階が母の家になっているのですが、とくに私は母に何も言わずに置いていったんです。そうしたら次の日の朝、母から「昨夜来た？」って聞かれて。不思議に思いながら私は行ってないことを告げると、「10時くらいに子どもが歩く音がして、ドアがスーって開いたの。だから子どもか誰か来たのかなと思ったんだけど」って言われて。でも誰も言ってないんですよ。私もうその人形が怖くなっちゃって。一清掃作業をするとき、現場の情報はどこまで教えてもらえるのですか？

鳩村 大概はわかりませんね。当日行くまで訪問先がどういう人だったのか知りません。様子が怪し

いので元請けの会社に聞いたら最初ははぐらかされたんだけど、改めて聞くと「ちょっと実は……」みたいな。

木嶋 以前は依頼される方を教えていただいていたんですけれどね。ここは死後3日ですねとか、2か月ですねとか。

一近隣の人たちから教えてもらうこともあるとか。

小島 喧嘩している声が聞こえるとか、けっこう聞くことがありますね。僕らのほうから身内の方にあまりプライベートなことをお聞きしないので。

古澤 近所の人がいちばん情報を知っていますよね。いつくらいとか、どのくらい経っているとか。

小島 身内が隠したい気持ちもわかります。

一木嶋さんにも、いわゆるゴミ屋敷の清掃で忘れられない体験があるそうですね。

木嶋 天井から30センチくらいの間のスペースで住んでいる方は、何人もいますね。人間が住めるとは思えないようなところですよ。だから当然トイレも埋まってしまって用も足せないわけです。この間頼まれたのは、3回目の常連さんでした。

一常連さんっていうのもあるんですか？

木嶋 単にだらしがないだけでは、あんなふうにはならないと思うんですけれども、やっぱり物に対する執着とか、物から発している霊のようなものがあるんじゃないかなって思うことは、まあまあありますよね。

一ところで、遺品整理の仕事はなぜ急増しているのでしょうか？

古澤 依頼も多くなっていますし、「何の仕事してるの」って聞かれたときに「遺品整理です」って答えると、「あー知ってる」って言われるケースが多くなりました。

小島 時間がないって方がいっぱい

いいんですよね。だから遺族が自分たちでいまやる時間がない。一処分を託された遺品はどうされるのですか？

小島 処分というよりは、リサイクルできるものや、リユースして使えるものなどは、また次の方にバトンパスじゃないですけど、そうさせていただいています。たぶん他の会社でも一緒だと思うんですけれども。

一いままでいちばん驚いたものは？

古澤 位牌ですね。

小島 どういう背景があるかわからないですけど、仏具一式いらないですっておっしゃる方もたまにいらっしゃいますね。

一処分の仕方は？

古澤 うちでは廃棄処分しています。やっぱりご家族が廃棄にしてっておっしゃるので、その通りにします。

一いまの仕事のやりがいとは何でしょうか？

古澤 私は、人のためになりたいのかもしれないですね。最初のお客様さんが泣いて喜んでくれたんですよ。そのときに「なんだこの仕事は」って思って、そこからどハマリです。早く現場に行きたいとか思っていますものね。

鳩村 お客様の笑顔とか、喜んだ顔とかをね、すごく体感して得られるので、やってよかったなと思っています。空き部屋の清掃をやっているときってお客様も誰もいないですけど、次にそこに住むであろう人に向けて掃除しているんですね。だから、基本的には人のために何かをしたいっていうような思いがあるからですかね。